

とやまの飲料水はいま

奥川 光治

京都市で生まれ育った筆者にとって富山の水のおいしさは格別である。

東京遷都の影響で街がさびれた京都市は、明治の中頃に琵琶湖疏水を引いて水資源の確保とともに発電、舟運などによって復興を図り、現在の礎を築いた。今も琵琶湖は京都市民に安定して飲料水を供給しているが、流域の開発が進んだ結果、一九六〇年代頃から富栄養化現象が顕在化し、カビ臭い水道水が大問題となった。

そんなカビ臭い水道水に「慣れ親しん」できた筆者だっただけに、アルプスの雪解け水を原水とする富山市の水道水は夏も冷たくておいしく感じたものであった。しかし、人間偉いもので、富山に移り住んで長く飲用しているとちよつとした水の変化もわかるものかと思う。数年前に北陸、とくに福井や新潟で豪雨災害があった日に、口に含んだ水道水のまずさは忘れられないものである。富山市の水源、常願寺川は上流に立山カルデラを控え、大雨のときに記録的な高濁度になると言われているが、そうになると浄水場では大量の凝集剤を注入し、濁りを取るようになる。私の舌はそれを感じたのだと思う。

富山県西部の水がめである子撫川ダムの富栄養化、鉛製の水道管、簡易水道の原虫による汚染などのニュースは、一般の人の目にはあまりとまらないかもしれないが、水道工学を教えているものにとっては、「とやまの飲料水」をめぐつて気になるニュースである。

ダム・貯水池は河川流量が豊富なときに貯留し、不足時に貯留水を活用するのが目的であり、水を滞留させるため、富栄養化が進展すると植物プランクトンが大繁殖し、いろいろな問題を引き起こす。前にあげたカビ臭、藍藻類の一種が作り出す毒性物質、酸化や消毒のために行なう塩素処理で生成される発ガン性など毒性のある物質などの問題である。もちろん子撫川水道管理所では高度浄水の一つである活性炭処理を行なつて対応しているが、完璧な技術ではなく、不安は残るのである。

また、長年水道管として使用されてきた鉛管からの鉛の溶出問題がクローズアップされている。これは鉛の毒性の強さを考慮して二〇〇四年に水道水質基準が強化されたのがきっかけであり、鉛管の更新が進められているが、市町村によってはその事業が完了するまでまだ長い年月が必要なところもある。

さて、以上あげた問題はいずれも現在の水道システム自身が抱える問題であることに気付く。一人が一日に使用する水量三〇〇〜三五〇リットルを、すべて飲める水として安定して供給するために薬剤を注入して大量に処理をする、あるいは貯水池を作り、水源を確保する、そしてパイプラインを縦横に布設して供給する。しかし、一人が一日に飲む水は二リットル程度であり、ほとんどは風呂、洗濯、トイレの洗浄水などとして使っているのである。資源とエネルギーを使って飲める水を大量に作り、ほとんどを洗浄水などとして使うのは、循環型社会を構築し、地球温暖化対策が求められている現在では矛盾を秘めていると思うのである。もちろん、現在の水道システムを今すぐ作り替えることはできないが、未来への課題として意識することが肝要である。

おいしくて安全な水としてミネラルウォーターが売り上げを伸ばし、富山のスーパーにもフランスやカナダなどからの輸入品や他府県産のものがたくさん並べられている。ペットボトル自身のリサイクルの問題もあるが、少なくとも、膨大な輸送エネルギーを使った輸入品や他府県産のミネラルウォーターではなく、地元の、自然に育まれたおいしくて安全なミネラルウォーターを、消費者が選択するのを期待したい。地下水は貴重な資源であり、おいしくて安全な飲料水として、未来永劫保全が必要である。

(おくがわこうじ・富山県立大学短期大学部環境システム工学科准教授(水質環境工学))